
クロニクル

雅人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クロニクル

【Nコード】

N1100X

【作者名】

雅人

【あらすじ】

ちよつと無愛想な潤とわりと明るい裕。二人の青年が偶然出会ったのは多分単なる偶然だけど、これから起きる出来事はもしかすると必然かもしれない。あと数年で大人になる彼らが恋にバイトに大学など、思春期のような青春を思春期の残り香で過ごしていく物語。

プロローグ（前書き）

萌えとかはあまり意識してないです。つたない文才なのでわけがわからない表現が多々あるかもしれませんが、読んで下さったら嬉しいです。

プロローグ

プロローグ

都心のベッドタウンの中にある広大な敷地を使った大学。どこにでもある私立大学に通う生徒達に紛れて学内の道を歩いていた。

目に映る景色が、全て色褪せて見える。肌に触れる冷たい秋風も感じない。木々や生徒達のざわめきも全て耳に入らない。自然と前に進む足取りとは異なり、顔は伏せたまま、心はどこかへ行ってしまったような・・・そんな気分だった。

考えがまとまらない。今まで起きた事、思い出が蘇っては脳裏にこびり付き、何を考えても様々な感情が思考をかき乱す。

俺は・・・。

「いつて！」

不意に正面から何かがぶつかって来た。何か、といっても考えるまでもなく誰かなんだが、いかんせん俯いて前を見ずに歩いていたから全く気付くことが出来なかった。完全にこちらの不注意だ。

「ごめん！ 大丈夫？」

こちらが謝るよりも先に相手が謝ってきた。目の前には、自分と同じくらいの年齢の青年がいる。身長も同じくらいの黒髪の青年だ。「急いでてさ！ 前見てただけど・・・人ごみかき分けて走ってたら急に君がいて、止まれなかったんだ！ ほんとごめん！」

青年はさらに畳み掛けるように早口で言った。どうやら青年は自分に非があると思っっているらしいが、客観的に見れば俯いてて前を見てなかったこちらが悪い。前を見ていれば避けれたかもしれない・・・。

「あのさ」

前を・・・見ていれば・・・俺は。

「君、大丈夫？ 顔色悪いし・・・どっか打った？」

もはや青年の声など耳に入ってこなかった。

「ちよ、おい！ 君！」

走り出した。この場にいたくなかった。ぶつかった衝撃で忘れていたさっきまでの事や考えが急に蘇って頭から離れなかった。

考えたくなかった。逃げ出したくなかった。

大学の敷地を出て、大通りではなく人気のいない道をただひたすら走る。車の走行音と、秋風と、ざわめく木々の音だけが耳に入っては消えてゆく。

今は無性に走りたかった。そして叫びたかった。

プロローグ（後書き）

これだけ読むと意味不明な文字の羅列で申し訳ないです。

第一話「落とし物」（前書き）

相変わらずつたない文ですが読んでくれると嬉しいです。

第一話「落とし物」

「どうしたんだ？ 急に」

名前も知らない同年代くらいの青年はものすごい早さで走り去っていった。今頃敷地外に出てしまっているかもしれない。青年が走っていった方向には生徒達による人ごみが見えるだけで、青年の姿は見えなかった。

「ここの生徒じゃないのかな？」

そんな考えが浮かんだ。今から一限が始まるのに全力疾走で敷地外に出て行く生徒はそういないと思ったからに他ならない。

「ん？」

振り返って教室に向かおうと思った矢先、視界に飛び込んで来たのは地面に落ちている携帯電話だ。流行のスマートフォンでもなければ、取り立てて新しい機種というわけでもない。ストラップもなにも付けてないシンプルな黒い折りたたみ式の携帯電話がそこにあった。

「これって・・・さっきの人のだよな」

そう考えるのが自然だった。とりあえず拾う。

「いるわけないよな！。もう見えないし」

すでに青年はいない。今からじゃ走って追いかけても見つける自信がなかった。

「どうすっかなー。ここに置いとくわけにもいかないし」

しかし無情にも考えてる暇は与えられず、一限開始のチャイムが鳴り始めた。

「やっべー！」

とつさにズボンのポケットに携帯を入れた青年は、さっきの青年さながらな走りで教室へ向かった。

何事もなく一限二限を過ごし学食で安くて不味い昼食を済ませ、これからバイト先のガソリンスタンドへ向かおうとした矢先に、唐突に携帯が震えだした。

「うえ!？」

あまりに唐突過ぎて思わず変な声が出てしまったが、無理もない今朝拾った携帯が震えだしたのだ。一限二限と過ごしてるうちにすっかり存在を忘れてしまっていた。

「やっべ忘れてた。本人かな？」

こうゆう時電話に出るべきか出ないべきかは人それぞれだと思うが、若干の躊躇いのしつとも出てみることにした。

「もしも『おい潤! お前巴に何かしたのか!?!』」

嗚呼出ない方が絶対に良かった。いきなり知らない人が知らない名前を二つも言っただけく人違いされて問いつめらるなんて、これは間違っても出るべきじゃなかった。でも、今更遅いし後には引けない。

「俺は潤じゃない裕だ!」

まずは人違いをなんとかすることから始めようと思って言った言葉だが、すぐに極端過ぎることに気付いたがもう遅い。

『何言ってるんだお前?』

ずいぶんと男みたいな喋り方する女だ。文面だけ見ると不良っぽい。

『ん? お前誰だ? 潤じゃないな』

そしてずいぶんと察しが良かった。

「えっと・・・俺は裕。多分この携帯が潤って奴のなら、落ちてたのを拾ったんだ」

『ふーん。なるほど・・・潤は?』

「わかんないんだ。出来れば早く返してあげたいんだけど」

相手はしばらく黙り込み、沈黙が続く。正直気まずかったので、返事がない間は歩いて大学を出る事にした。

この調子じゃバイト先に着く、と思っていた頃、ちょうど今朝潤

に会った所辺りで相手はやつと喋りだした。もつとも、さつきからずっと必死に考えるように唸ってはいたが。

『お前、この後の予定は？』

いきなり予期せぬことを聞かれたが、今度は流石に変な声は出さなかった。

「この後すぐにバイトが十時までであるけど」

『おっそいなー!』

困ったと驚き半分半分の割合で叫ばれ、鼓膜に突き刺さる。

『んーまあいいや。十時になったらまたその携帯に連絡するから、落とさずちゃんと持っとけよ!』

ブチつと音が鳴ったかのような勢いで電話を切られた。

「それは持ち主に言えよ」

そう思いつつ口にしつつ、携帯をポケットにしまう。いつも通りの時間にバイト先に行き、いつも通り仕事を始めた頃には、再び携帯のことなどすっかり忘れてしまっていた。

第一話「落とし物」(後書き)

短くてすみません。

次はもっと長く書きたい。書けるようになりたい。

第二話「初対面」(前書き)

真夜中にアニソン聴きながら書きました。

小説って書くの大変だなと、つくづく思われました。
読んで下さったら、嬉しい限りでございます。

(同名の小説、多いですね。なんか申し訳ないです)

第二話「初対面」

疲労。そして疲労だった。たとえそれがどんな仕事内容で、そしてそれがバイトだろうが正社員だろうが、8時間以上働いたら誰だって疲れるだろう心身共に。裕の思考は疲れたしか単語が出てこなかった。口から出る言葉も二言目以前に開口一番「疲れた」である。しかし働いてお金を貰うということは元来そうゆうものだ。

「携帯、スゲー鳴ってたぞ」

バイト先の一年先輩であり、年齢も一年先輩の一樹がそう言った。

「え？ ホントですか？」

「ああ」

とだけ言って、休憩が終わった一樹は休憩所から出て行った。見送りつつ、休憩所の机に置いてあった携帯を見る。が、着信はおろかメールすら来てなかった。

「来てないじゃん」

誰か別の人のと勘違いしたんだなあと思い、更衣室に入る。自分のロッカーを開けて着替えを手に取り・・・携帯がけたたましく鳴った。

一瞬全く状況が理解出来なかった裕であったが、刹那の後にすぐに思い出し、ズボンのポケットに入ってた潤とやらの携帯を取り出す。

今度は、サブディスプレイに「百合」と書いてあるのが見る余裕があった。

「もしも『やっと出たなお前！』」

どうもこの百合って奴は開口一番は人の言葉を遮る事から始まるらしい。

『遅いぞ今何時だと思ってるんだ！』

十時である。終わる時間は伝えたはずである。

『いいか、よく聞けよ！』

と言いつつスゴいでかい声で逆に聞き取りづらいのだが、とにかく早口で百合は自分たちのいる場所を言った。そして。

『今すぐ来いよ!』

とだけ言って切った。竜巻みたいな女だ。

「どこだよそこ・・・」

そして率直な疑問を言いつつ、着替えを始める裕であった。

帰り際に一樹に聞いた話によれば、百合と潤が今いるお店は「グリーンフ」（和訳で悲しみ）というお店で、隣町の住宅街の中にポツンとある自営業の喫茶店だとか何とか。

隣町と言っても街と町の境にあるところだから距離的にはそう遠くはなかった。が、いかんせん住宅街の中はまるで迷路だった。初めて来た裕にとっては土地勘が無いため現在地すら全くわからず。

「どこだよここ・・・」

案の定迷子になった。

そもそも入り組んだ住宅街の中にある店を待ち合わせ場所にする百合とかいうのの神経を疑った裕だが、思えばちゃんとその場所がわからないことを伝えなかった自分にも非があるような気がしないでもないのです、とりあえず今は考えないことにした。考えても仕方ないことなので。

そしてなにより寒かった。秋といっても朝や夜は寒い。今日は風も吹いてて一段と寒かった。

「はあ・・・さみ。あー・・・あれかな?」

それっぽいロゴの看板が入り口の上に掛けてある、住宅街の家々の中でも一際明るい店があった。というか、間違いなく指定された店だった。

「いらっしやい」

店内は温かった。外観も内装もログハウスのような感じで、ちよつと不思議というか独特な雰囲気が出ていた。店員は二名しかい

ないのか、ウエイトレスの女性とキッチンの置くにいる店長っぽい
わりと若い男性が同時にいらっしやいと言った。

「全席禁煙ですが、好きなお席へどうぞ」

「あ、先客がいて呼ばれたんですが」

ウエイトレスは頭上で電球を光らせたような顔をした。擬音で表
現するなら「ピンコン！」だ。

「裕さんですか？」

「あ、はい」

言うが早い。「こちらへ」と言って促された。店の一番角で奥の
四人席には茶髪でショートカットの女子と、今朝ぶつかった青年が
いた。

「ごゆつくりどうぞ」

ウエイトレスはキッチンの方に消えていった。この店、遅いから
かあんまり客いないな。と裕は思った。

「お前が裕か」

「そうだけど・・・」

電話でも聞いた声。男勝りな喋り方。睨みつけるような視線。こ
いつが百合か。

「まあ座りなよ」

「ああ・・・」

なんか怖いな。だがさつきより言葉から怒気が消えた気がした。

「アタシは百合。こっちが潤。潤は違うけど、アタシとお前は同じ
大学だよな。よろしく」

「よろしく」と返したけど、よろしく出来る自信がなかった。

「返せ」

スゲー殺気のこもった台詞が刃になって胸に突き刺さった感覚が
した。

「・・・あ、携帯か。ごめんなすぐに返せなくて」

潤は裕の手から携帯を一瞬で取った。

「中身は？」

「は？」

「見たか？」

「見てないよ」

「ならいい」

潤は立ち上がったて立ち去ろうとした。同時にさっきのウェイトレスが盆に水の入ったコップを乗せてやって来た。

「待ちなよ潤」

百合が呼び止めた。潤は振り返らずに立ち止まる。

「お礼くらいするべきじゃないの？ 携帯無くてアンタだって困ったでしょ」

「ぶつかってきたコイツが悪い」

「な、アンタねえ！」

百合が呼び止めるより先に潤は店から出て行った。ロングコートの裾を翻して去っていく姿は、何故かかっこよく見えた。

「待ちなさい！ 潤！ ったくもー素直じゃないんだから」

今気付いたけど、百合は潤に対してと俺に対してとじゃ口調が違う気がする。気のせいだろうか。

「ごめんな。アイツの分までアタシが謝るよ」

「別にいいよ。アイツの言う通り、元々ぶつかった俺が悪いんだしな。それより今日中に返せて良かったよ」

これは本心だった。まあ少しはイラッとしたけども。

「お前・・・良い奴だな！」

急に口調と接するテンションが変わって一瞬人が変わったかと思っ

った。
「裕、これからもよろしくな！」

「ああ・・・うん」

「じゃあアタシはあのバカ追っかけるから、今日はもう帰って良いよ！ あ、これアタシのアドレスと携帯の番号な。なんか困ったらいつでも声かけるよ！」

良いながらメモを残して走り去っていった。電話でも思ったが本

当に竜巻みたいな女だった。そして、すごく単純だった。

「まあ良い奴つてのは・・・褒め言葉だよな」

お前もだけどな。と心中で付け加えて。

「ふふっ、百合さん達とすっかりお友達ですね」

さっきのウェイトレスが素敵な笑顔で話しかけに来た。

「そうですね・・・達かどうかはわかんないですけど」

「百合さんってね、初対面の人には攻撃的だけど懐く、じゃなくて仲良くなるとすっごく可愛いんですよ」

名も知らぬウェイトレス（高校生かな？）の一時黒い部分が見えた気がしたけど気のせいにおいた。まあでもまったくその通りだとも思う。百合は本当にわかりやすい性格をしていた。たとえば犬でピツタリだ。

「・・・とりあえずコーヒーでももらおうかな」

「かしこまりました。あと、二人の分のお会計もお願いしますね」
は？

差し出された伝票には・・・二人の夜飯代やらなんやらが色々書かれていて・・・総額三千円くらいはありそうだった。

「ほとんど百合さんですけどね」

前言撤回。あの二人食い逃げしやがった。

心中で呆れつつ、二人の分の会計を済ませて裕は家路を急いだ。

第二話「初対面」(後書き)

すみません体力的限界なんで一回投稿して後日書き足します。 2011/10/03 (2:00)

書き足しました。もうノリで書いたからグダグダ。 2011/10/04 (0:00)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1100x/>

クロニクル

2011年10月4日03時20分発行